

# 2022年度一般入学試験問題

## 国語

(2月7日)

開始時刻 午後1時00分

終了時刻 午後2時00分

### 注意事項

1. 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
2. この冊子は17ページです。落丁、乱丁、印刷の不鮮明及び解答用紙の汚れなどがあった場合には申し出てください。
3. 解答用紙には解答欄以外に次の記入欄があるので、監督員の指示に従って、それぞれ正しく記入し、マークしてください。

① 受験番号欄

受験番号を記入し、さらにその下のマーク欄にマークしてください。正しくマークされていない場合は、採点できないことがあります。

② 氏名欄

氏名とフリガナを記入してください。

4. 解答は解答用紙の解答欄にマークしてください。例えば、

10
----

と表示のある問いに対して◎と解答する場合は、次の(例)のように解答番号10の解答欄の◎にマークしてください。

(例)

10	◎	○	○	○	○
----	---	---	---	---	---

5. 問題冊子の余白等は適宜利用してもかまいません。
6. 試験終了後、問題冊子は持ち帰ってください。





次の文章を読んで、問一〜八に答えなさい。

「つかふ」という語の含むところは、「使う」という語よりはるかに広い。今日わたしたちが口にする「使う」という語が意味しているのは、人が物を、別の人を使う、それもみずからの意志するものの実現のために、その道具として、手段として、利用するということであろう。「使用」には、使用者と使われる物ないしは人との分離ということが前提として含まれる。非タイショウ<sup>ア</sup>の力関係である。ここではイニシアティブは使う側にあ  
る。けれどもこれは、右に見たように「つかふ」ということのほんの限られた局面でしかない。

たしかにわたしたちは日々、道具を、そして人を、使っている。が、道具を使うということにおいてさえ、その関係は、使用する側から使用されるモノへの単方向のものではない。道具を使うということは、道具というモノの（わたしたち自身とは異なる）構造を受け容れることで、逆に自己の可能性の範囲を拡げてゆくことである。ということは、道具は X とともに、身体のはたらかきもまた道具によって変容させられてゆくとい

うことである。このときもちろん、身体のフィジカルな条件が変わるということはない。指が増えるわけでもなければ、器官の配置が変更されるわけでもない。が、『法の哲学』第九〇節においてヘーゲル<sup>(注1)</sup>が所有について語っているところをもじっていえば、使用においてわたしの身体が外なるモノのなかにおのれを置き入れるとき、わたしの身体は、そのモノのうちに反映されるとおなじだけそのモノにおいて捉えられ、規定される。この相互変容の過程は、身体とモノという二項のあいだの閉じた関係として起こるのではないということ、このことにまず留意しておく必要がある。

<sup>A</sup>人を使うということについても、おなじことがいえる。他人を道具として使うといえ、他人を手段として利用しているとか、人としてのその存在を蹂躪<sup>じゅうりん</sup>している、搾取しているなどと、 Y である。じつさい、他人の体を性的快楽の手段として用いることとして、搾取を意味する

exploitation と sex の合成語、sexploitation（性的搾取）という言葉もあるくらいだ。身のまわりを見ても、他人を自己の欲望充足の手段としたり、他人をじぶんの手足としてこき使う例に事欠かない。

ここで、人の存在を手段にしてはならないということに正面切つて異論を唱える人はおそらくいない。ただしここでは、人を、あるいはその身体を使うということが、他者の存在をじぶんの利益のために利用することとおなじとされている。けれども、他人を蹂躪するのではなく、他人との深い信頼のなかで、たがいの体を使いあうという場面が、それこそ「おたがいさん」と声をかけあい、助けあうなかに、あたりまえのようにあったはずだ。

(中略)

それなのに何かを「つかふ」、とりわけ人を「使う」という場面になると、現代人の物言いはなぜかひどく窮屈なものになる。それは、すこし先走っていえば、「つかふ」ということが、それがだれかのものであるからという意味で「所有」という観念と結びつくときに、「つかふ」をめぐる議論が《権利》の次元に移行することと関係している。

「使用」と「所有」という二つの概念の錯綜さくそうについてはいずれ詳しく見ることになるが、ここでさしあたって言っておきたいのは、西欧近代の所有権をめぐる議論のなかでは「所有〔権〕」の概念は「自由処分権」(disponible/disposability)、つまりあるものを意のままにしてよい権利と結びつけて考えられてきたということである。これはわたしのものである、だからそれをどうしようかとわたしの勝手である、という理屈である。これは、生命や身体、財産といったおのれの存在のコアとなるものを、わたしの意に反して他者がみだりにシインガイすることを阻むという意味で、個人の〈自由〉の根幹をなす、ひじょうに大事な考えである。

けれどもこれは同時に、わたしが意のままにしてよいものを排他的に限るということでもある。するととたんに議論は硬くなってしまふ。どこまでがわたしが意のままにしてよい領域で、どこからが他者の領域かという、境界の意識が先に立つからである。ある物・者の「使用」についても、使用する前に、それを使ってよいのかどうかという意識が先に動きます。使う者と使われる物・者のあいだに「べし／べからず」という規範的な意識が挟まるのである。このところでいえば、《コンプライアンス》という概念にもそういう面がある。企業や行政の組織においては、何ごとをするにしても、それにとまなう責務とそれについての説明責任とが問われるようになっていく。そこで、糺ただされないように、責められないようにと、他者とのリスクな関係を控える、リスクが生じるような場面を予防的に回避するといった意識が強くなる。抑制や点検、監視の意識ばかりが先行し、そこからは(complyという語のもつ)要請に応じる、人の願いに応えるという、いわばこちらから迎えにゆくような心持ちが、「自粛」という名の萎縮に裏返ってしまう。使う者と使われる物・者との深い交感をあらかじめ回避するような

たしかに、(他者を)「使う」という関係は、奉仕という名の「搾取」ないしは「篡奪さんだつ」へとしばしば反転する。サーヴィス(奉仕)がサーヴィチュード(隷属)へ、である。「世話して当然」という意識が、世話を自発的なものでなくし、強制へと裏返してしまうのだ。そこにはまた、「ケアする者がケアされる者にケアされ返す」という「達成感」(お駄賃?)がことさらに強調されて、だから少くらい労働条件が不利なものでも我慢しなければ、といった奇妙な理屈がまかり通る。この点で、「使用」は危うい事態でありまた概念でもある。こういうことがたしかにある。

けれども、《権利》の次元でのそういう語り口が、もう一方で、「つかふ」ということのイメージをとてみても貧しくしていることも、おなじようにたしかである。ひとはたとえば老いのなかで、「世話をしてもらえばかりで、こっちは何にもしてやれずに申し訳ない」といった意識にしばしば苛あざまれれる。迷惑をかけてばかりで済まないという意識である。しかし、これはほんとうに迷惑をかけることなのだろうか。迷惑をかけてはいけないと遠慮す

ることのほうが、じつはもつといけないことだったはずではないのか。そしてそういう思考の回路こそが、現在、<sup>C</sup>人の存在をととも淋しくさせている  
ということはないだろうか。

ひとは齡よわいの幾つを問わず、支え、支えられて暮らすほかない。ひとは二十四時間要介護の状態生まれ、また死んでゆく。そのあいだの「自立」の  
時期でも、じぶん一人の生活ですら独りでは賄いえず、他人との分業ウにオウウしかかない。となると、他人に凭もたれかかってなにか悪いのか。迷惑をかけあ  
うということは人の常態なのであって、その迷惑をかけあうという関係から逃げないでくれた人には——呑のんだくれ、くだを巻いては周りの人を  
困らせ、借金も踏み倒してついに朝の海に消えた、あのたこ八郎(注2)の人生締めくくりの言葉を借りて——「めいわくかけて ありがとう」とこそ言うべ  
きではないのか。たつぷりと迷惑をかけさせてもらえるような関係をもたせてくれてほんとにありがとう……と。

(鷺田清一『つかふー使用論ノート』による。設問の関係上、本文を改めたところがある。)

(注1) ヘーゲル——ドイツの哲学者。

(注2) たこ八郎——元プロボクサーのコメディアン。

問一 傍線部ア～ウと同じ漢字を含むものを、次の(a)～(e)のうちから一つずつ選び、解答欄の記号をマークしなさい。解答番号は、アが

イが 、ウが 。

ア タイシヨウ

- (a) 平和のシヨウチヨウ
- (b) ケイシヨウを省略する
- (c) 原稿とシヨウゴウする
- (d) 子にカンシヨウしすぎる
- (e) シヨウカイ状を書く

イ シンガイ

- (a) フカシン条約を結ぶ
- (b) 広くシントウする
- (c) 打撃フシンに陥る
- (d) 自宅でキンシンする
- (e) 作品をシンサする

ウ オウ

- (a) 軽佻フハクの世の中
- (b) 事業再建にフシンする
- (c) うわさがルフする
- (d) 第一人者をジフする
- (e) 両親をフヨウする

問二 空欄  に入る表現として最も適切なものを、次の(a)～(e)のうちから一つ選び、解答欄の記号をマークしなさい。解答番号は、

。

- (a) 自己を洗練したものになる
- (b) 身体を搾取したものになる
- (c) 自己を模倣したものになる
- (d) 身体を拡張したものになる
- (e) 自己を歪曲したものになる

問三 傍線部A「人を使うということ」とあるが、人を使うということは、どのようなことであると筆者は考えているのか。その説明として最も適切

なもの、次の①～⑤のうちから一つ選び、解答欄の記号をマークしなさい。解答番号は、

5。

- ① 人を使うということは、使用者が使われる者に本来自らが行うべきことを代わりにやってもらうことであると考えている。
- ② 人を使うということは、使用者が使われる者を自己の目的を達成するための手段として利用することであると考えている。
- ③ 人を使うということは、使用者と使われる者とがともに変容することで、同一になってしまうことであると考えている。
- ④ 人を使うということは、使用者と使われる者との間に変化することのない絶対的権力関係が成立することであると考えている。
- ⑤ 人を使うということは、使用者と使われる者との間にある深い信頼関係のもとで互いに支え合うことであると考えている。

問四 空欄 Y に入る表現として最も適切なものを、次の①～⑤のうちから一つ選び、解答欄の記号をマークしなさい。解答番号は、

6。

- ① 目を眩くらまされそう
- ② 顔を曇くもらされそう
- ③ 手に余ることになりそう
- ④ 腹を括くることになりそう
- ⑤ 胸を焼かれそう

問五 傍線部B「現代人の物言いはなぜかひどく窮屈なものになる」とあるが、それはなぜか。その説明として最も適切なものを、次の①～⑤のうち

から一つ選び、解答欄の記号をマークしなさい。解答番号は、

7。

- ① 人を「使う」という場面では、人を自由に使おうと思うが、現実にはそのように上手くいくものではないから。
- ② 人を「使う」という場面では、人の立場に立つことができず、自分のことばかりを考えてしまいがちであるから。
- ③ 人を「使う」という場面では、どこまで自分の意のままに用いられるのかという意識が先に立ってしまうから。
- ④ 人を「使う」という場面では、《権利》意識が強くなって、主導権を顕示することばかりに気持ちが向かうから。
- ⑤ 人を「使う」という場面では、柔軟な考え方をすることが難しくなり、人間関係がぎくしゃくしてしまうから。

問六 空欄 Z

に入る表現として最も適切なものを、次の(a)～(e)のうちから一つ選び、解答欄の記号をマークしなさい。解答番号は、

8

- (a) 皮相的
- (b) 懐疑的
- (c) 硬直的
- (d) 虚無的
- (e) 恣意的

問七

傍線部C「人の存在をとても淋しくさせている」とあるが、何がそうさせているのか。その説明として最も適切なものを、次の(a)～(e)のうちから一つ選び、解答欄の記号をマークしなさい。解答番号は、

9

- (a) 自分は世の中に何の貢献もできず、ただ生きていくだけであると卑屈になってしまうこと。
- (b) 他人に寄りかかってはいけない、一人で生きていかなければならないと考えてしまうこと。
- (c) 世話をしてくれる人のことなどを考えずに、世話にはならないと意地を張ってしまうこと。
- (d) 自分の我を強く押し通そうとし、他人とともに生きていくことができなくなってしまうこと。
- (e) 実際は他人に迷惑をかけてばかりなのに、そうとも知らずに傲慢に振る舞ってしまうこと。

問八

本文の内容と合致しているものを、次の(a)～(e)のうちから一つ選び、解答欄の記号をマークしなさい。解答番号は、

10

- (a) ケアする者はケアすることによって自分がケアされるのだから、ボランティアで他者のケアを行うべきである。
- (b) 近代になって所有の概念を持ってしまったがために、人間は個人の自由を喪失することになってしまった。
- (c) 主導権を握っているのは使用者であるから、使われる者や物に対して絶対的な権力を振るうことができる。
- (d) 他者に迷惑をかけるのは人として当然のことであるので、人を使うということは必ずしも悪いことではない。
- (e) 人間は所有という観念や権利意識から離れることにより、はじめて豊かな生を営むことができるようになる。

次の文章を読んで、問一～六に答えなさい。

話は「完全」<sup>A</sup>と「不完全」という概念の分析から始まります。私たちはこれらの言葉を日常的に使っています。たとえば建築途中の家を見ると不完全だ、つまり、完成していないと口にする。では、なぜそれを不完全と呼ぶかというと、私たちが完成された家についての一般的観念をもっていて、それと比較しているからです。たとえば、「まだ屋根がついていないから完成していない」という具合です。

完全／不完全は人間が作るものだけでなく、しばしば、自然界のものについても言われます。たとえば牛という動物について、牛の一般的観念と一致すれば、私たちはそれを完全と言い、そうでなければ不完全と言う。角が二本あれば完全だけれど、一本だから不完全だという具合です。

しかしこの一般的観念というのはいわゆる偏見です。これまで何度も見たものに基づいて作られた観念にすぎないからです。それぞれの個体はただ一つの個体として存在しているにすぎません。

そのことを指摘したスピノザは、すべての個体はそれぞれに完全なのだと言います。存在している個体は、それぞれがそれ自体の完全性を備えている。自然の中のある個体が不完全と言われるのは、単に人間が自分のもつ一般的観念、つまり「X」という偏見と比較しているからであって、それぞれはそれぞれにただ存在しているのである。

このことはいわゆる心身の「障害」にも当てはまります。「障害」というのも、マジョリティの視点から形成された一般的観念に基づいて判断されているにすぎません。個体それ自体は、一個の完全な個体として存在しているのです。

さて、善悪の話が始まるのはここからです。自然界に完全／不完全の区別が存在しないように、自然界にはそれ自体として善いものとか、それ自体として悪いものは存在しないとスピノザは言います。印象的な一節を引用してみましょう。

善および悪に関して言えば、それらもまた、事物がそれ自体で見られる限り、事物における何の積極的なものも表示せず、<sup>し</sup>思惟の様態、すなわち我々が事物を相互に比較することによって形成する概念、にほかならない。なぜなら、同一事物が同時に善および悪ならびに善悪いずれにも属さない中間物でもありうるからである。例えば、音楽は憂鬱の人には善く、悲傷の人には悪しく、<sup>善</sup>聾者には善くも悪くもない。(第四部序言)

「思惟の様態」という少し難しい言い回しが出ていますが、いまのところは飛ばして読んでください。前半は自然界に善悪が存在しないことを述べ

ています。事物は「それ自体で見られる限り」、善いとか悪いとかは言えない。つまり、それ自体として善いものとか、それ自体として悪いものは存在しない。それは自然界に完全／不完全の区別がないのと同じである。

興味深いのはその Y を示す後半部です。完全／不完全の考えは、我々が形成する一般的観念との比較によってもたらされるのでした。では、自然界には存在しない善悪の考えが私たちのもとにもたらされるのはどのようにしてでしょうか。

スピノザはここで、組み合わせとしての善悪という考え方を提案します。例として取り上げられているのは音楽です。

「憂鬱の人」、つまり落ち込んでいる人と音楽が組み合わせられると、その人には力が湧いてきます。その意味で落ち込んでいる人にとっては音楽は善いものです。「悲傷の人」というのは、たとえば亡き人をイタ<sup>ア</sup>んでいる状態にある人のことです。そのような人にとっては、音は悲しみに浸るにあたって邪魔であるかもしれません。そのような意味でその人にとって音楽は悪い。「聾者」、つまり耳が不自由な人には、音楽は善くも悪くもありません。

音楽それ自体は善くも悪くもない。ただそれは組み合わせによって善くも悪くもなる。つまり、自然界にはそれ自体として善いものや悪いものはないけれども、うまく組み合わせるものとうまく組み合わせられないものが存在する。それが Z だとスピノザは考えているわけです。

たとえばトリカブトという植物について考えてみましょう。よく知られているように、トリカブトが人間の中に入ると、人間の身体組織を何らかの仕方で破壊します。だからトリカブトは「毒」と言われます。しかし、それはトリカブトと人間の組み合わせが悪いということを示しているにすぎません。トリカブト自体はただ一つの完全な植物として自然界に存在しているだけです。トリカブト自体は悪くない。人間とうまく組み合わせることができないだけなのです。

あるいは、私がよく挙げるのが鼻水の薬の例です。鼻水の薬というのは、鼻水が出て困っている人にとっては、鼻水が止まるので善いものです。この薬によって普段通りに活動できるようになる。けれども、鼻水の薬は涙腺や唾液腺の分泌を抑えることで鼻水を止めています。ですから、鼻水に困っていない人が飲むと、喉がカ<sup>イ</sup>ワいて非常に困ることになる。その人にとっては鼻水の薬は悪いものだということです。

（國分功一郎『はじめてのスピノザ 自由へのエチカ』による。設問の関係上、本文を改めたところがある。）

（注）スピノザ——オランダの哲学者。

問一 傍線部ア、イと同じ漢字を含むものを、次の(a)～(e)のうちから一つずつ選び、解答欄の記号をマークしなさい。解答番号は、アが

イが 12。

- |                  |               |
|------------------|---------------|
| ア<br>イタんで        | イ<br>カワいて     |
| (a) 地価がトウキする     | (a) 平和をカツボウする |
| (b) 古い習慣をトウシユウする | (b) カットウに苦しむ  |
| (c) 音楽にトウスイする    | (c) カツサイを博する  |
| (d) 犠牲者をツイトウする   | (d) エンカツに事が運ぶ |
| (e) トウテツした論理     | (e) イツカツして扱う  |

問二 傍線部A「『完全』と『不完全』という概念」とあるが、これらについてスピノザはどのように考えているのか。その説明として最も適切なものを次の(a)～(e)のうちから一つ選び、解答欄の記号をマークしなさい。解答番号は、

13。

- (a) 完全な個体が善き存在で、不完全な個体が悪しき存在であると、人間は思い込んでいるとスピノザは考えている。
- (b) 完全な個体など現実世界には存在しないのに、人間が恣意的に規定しているだけであるとスピノザは考えている。
- (c) 不完全な個体など一つも存在せず、存在しているからには、それは完全な個体であるとスピノザは考えている。
- (d) 人間は一般的観念により完全と不完全を分類しているが、その分類はやめるべきであるとスピノザは考えている。
- (e) 人間は自らの体験をもとに一般的観念を作るが、それでは完全と不完全を捕捉できないとスピノザは考えている。

問三 空欄 X に入る表現として最も適切なものを、次の(a)～(e)のうちから一つ選び、解答欄の記号をマークしなさい。解答番号は、

14。

- (a) この個体はこのようなものだ
- (b) この個体はこうあるべきだ
- (c) この個体をみんなは完全だと思っている
- (d) この個体が完全な状態だ
- (e) この個体を基準にしなければならない

問四 傍線部B「善悪の話」とあるが、ここでは善悪についてのどのようなことが話されているのか。その説明として最も適切なものを、次の(a)～(e)のうちから一つ選び、解答欄の記号をマークしなさい。解答番号は、

15。

- (a) 自然界に完全な存在や不完全な存在がないように、人間界においても善いものや悪いものは存在しない。
- (b) それ自体では善いとも悪いとも判断することができないので、そのような判断を決して下すべきではない。
- (c) 善悪は自己の主観によって各自が決めるのではなく、事物を相互に比較することで決めなければならない。
- (d) 完全／不完全、善／悪は存在しないのだから、完全／不完全、善／悪といった概念を使用すべきではない。
- (e) 善悪は事物それ自体が本来的に持っているものではなく、組み合わせの中で付与されていくものである。

問五 空欄 Y・Z に入る表現として最も適切なものを、次の(a)～(e)のうちからそれぞれ一つずつ選び、解答欄の記号をマークしなさい。解答番号は、Yが 16、Zが 17。

Y a 結果

- (b) 理由
- (c) 例示
- (d) 手段
- (e) 目的

Z a 善悪の起源

- (b) 善悪の機能
- (c) 善悪の方便
- (d) 善悪の陥穽せき
- (e) 善悪の功罪

問六 本文の内容と合致しているものを、次の①～⑤のうちから一つ選び、解答欄の記号をマークしなさい。解答番号は、

18

- ① 角が一本しかない牛は不完全な存在であると人間は思うが、神が創造したのであるから完全な牛である。
- ② トリカブトは人間の身体組織を破壊する悪なるものであるので、全滅しなければならぬ植物である。
- ③ 落ち込んでいる人にとって音楽は、心を癒し、生きる力を取り戻す手助けをしてくれる善きものである。
- ④ 鼻水の薬は、鼻水で困っていない人が飲むと鼻水を出すように作用するという悪しき効果を生んでしまう。
- ⑤ 建築途中の家は完成していないので建物としては不完全であるが、不完全だと認識することは正しくない。

メ モ

試験問題は次に続く。

次の文章を読んで、問一～六に答えなさい。

この原稿で与えられているテーマは、「詩が生まれる場所——実作を通して、詩が生まれるときについて考えるところを述べよ」というものである。しかし正直なところ、私にとってそのような「場所」はない。「詩が生まれる場所」も、「詩が生まれるとき」も。私の実作においては、詩は生んだり生まれたりするものではないからだ。少なくとも、そういう感覚のものではない。書き手が詩を自身の身体を使って紙の上などに書き起こしてひとつの作品のかたちに仕上げることは、その行為を指して、「一篇の詩を生む」と呼ぶことは出来るかもしれない。しかしそれは私にとっては言葉のあやでしかない。私自身の実作に限って言えば、詩は書き手（私自身）がひとつの目に見えるかたちに仕上げるものではあっても、私自身が詩を「生む」わけではない。ましてや、私の中に、おのずから「生まれて」くるものでもない。私にとって詩は、自身の身内にわき上がってくる詩興や感慨、感情などを書きつけるものではない。詩はすでにそこ（どこか）にあり、詩を書く私は、それを見つけ、紙の上に忠実に再現し果すことを、一篇の詩を書き上げることと考え、実践しているつもりである。私の実作において、詩を書こうとすることは、まず詩を探すことであり、見出すことであり、そしてそれを目に見えるかたちに再現することである。

## ①

詩を書くときのこの感覚は、子どもによくやった、〈字かくし〉という遊びに似ている。コウテイの隅などで、一人の子どもが地面に石やボウキレで、ある文字を深く彫りつける。たとえば、〈む〉〈は〉〈ぬ〉などというふうには、彫りつけた後には、文字の上にまた土をかぶせて平らにし、その下に何という文字が彫ってあるか、相手にわからないようにする。そこでもう一人の子どもが、てのひらや指で土の上をなぞって、そこに何という文字が刻み込まれているかを掘り当てる。そんな遊びだ。

## ②

繰り返しになるが、私にとって詩は、自分の胸の中におのずからわき上がってくるものではない。すでにそこにあるものを、自分で探し、掘り当て、見出すものであり、さらにその見出したものを、確実に文字に起こし、書き写していくものである。それは身内にわきあがる感興でも、感傷でもない。むしろ私自身の実作においては、思考や考察にすこぶる弱いこの頭による考えは、一切あてにはしない。それどころか、ほとんどはなから排除すべきものとしている。下手な小手先の技術や愚考を作品に混ぜてしまうことは、作品を濁らせ、間違わせてしまう危険性がある。私にとって詩は、私の思いや主張、感慨や感傷などを歌う場や手段ではない。むしろ、己の主観や愚見を一切排し、ただすでにそこにあるものを、すでに彫り込まれているものを、ただ忠実に掘り起こし、写し取り、再現していくものである。

## ③

詩はどこにあるかわからない。それを見つげるためには、つねにアンテナを張り、地を、空を、宙を、手のひらでなぞり、つむった目を凝らし、ひらいた目は瞠みはつていなければならない。耳もすまし、聞こえない音にも耳を傾けていなくてはならない。詩は、必ずしもはつきりとしたかたちをとって、目に見えやすいというものではない。むしろその反対で、それらはしばしばとても目につきにくい。あるいは目に見えないところに隠れているものもある。それを見つけて、目に見えるかたちにしていくこと、つまり一篇の詩に書き起こすことを、自分自身のなすべき仕事と信じて（思い込んでも）作業を続けているのである。詩を書くという作業の中では、見ようとするものの一端が見えていながら、その後も先もまったく見えてこないということもある。逆に、ほとんど見えているのに、どうしてもその一点だけが見えないということもある。そういうときに、決して自らの不確かな想像や小手先の技をロウウして、ありもしないところに、捏造ねつぞうした枝葉を接いでいってはならない。それは作品を殺すことになるばかりでなく、自らをも傷つけ間違わせる、やってはならない行為であるのだ。

## ④

詩は胸で感じ、その感じや感じ取ったものを手で書き表すだけのものではない。心とからだ全身を使って、もの（＝詩）に触れるためにひたすら歩きまわり、どこに詩があるか、埋まっているかと探し求めて、ようやくそこで見つけたり掘り当てたりした何かを、忠実に、確実に、言葉に置きかえ、紙に写し取っていくものである。こうした作業と運動が、私にとって一篇の詩を書くこと、書き上げるということである。

## ⑤

詩を書く人は多く、その書き手らがどのような書き方をしているかといえば、それは X であるはずである。私の言うような詩作法は、非常に偏った、いびつなものであるかもしれない。しかし、誰がどんな書き方をしたとしてもかまわない。それが詩のよいところでもあり、光である。私にとって詩は、探すもの、見つげるもの、見出すものであり、そしてそれを写し、叙して、再現するものである。詩を書くために必要な力として、一般的には、鋭い感性や感覚、感受性、想像力など、いろいろと挙げられるかもしれないが、私自身**B**が実作において必要とするもの、必要として求めてやまないものは、ありていに言えば、視力であり、洞察力であり、表現力である。そして何よりも、見つからないものを探し続ける体力と精神力、あらわしにくいものをも表現しようとする努力を持続させる根気と勇氣であると言える。それらの力を養って、これからもひとつでも多くの詩を見つけ、目に見えるかたちにしていきたいと願っている。

（日和聡子『この世にて』による。設問の関係上、本文を改めたところがある。）

問一 傍線部ア～ウと同じ漢字を含むものを、次の(a)～(e)のうちから一つずつ選び、解答欄の記号をマークしなさい。解答番号は、アが

イが 20、ウが 21。

- |  |  |
|--|--|
| ア コウ テイ  | イ ボウ キレ  |
| (a) テイ サイを気にする<br>(b) 正しいオン テイで歌う<br>(c) 黒白をホウ テイで争う<br>(d) 立派なテイ タクを建てる<br>(e) カテイ 内感染が拡大する | (a) タボウ な毎日を送る<br>(b) 仕事のアイ ボウをさがす<br>(c) 裁判をボウ チョウする<br>(d) ゼン ボウが明らかになる<br>(e) ムボウ な計画をたてる |

- ウ ロウ|して
- |   |
|---|
| (a) 運命にホン ロウされる<br>(b) カロウ で倒れた<br>(c) ロウ デンで火災が起こる<br>(d) 敵に囲まれロウ ジョウする<br>(e) 詩をロウ ドクする |
|---|

問二 傍線部A「それは私にとっては言葉のあやでしかない」とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適切なものを、次の(a)～(e)のうちから一つ選び、解答欄の記号をマークしなさい。解答番号は、

ちから 22。

- (a) 自分が紙に詩を書きつけることは事実であるが、それを「詩を生む」と言うのは、表現上の言い回しに過ぎないということ。
- (b) 詩とは、自分の中から生んだり生まれたりするものではなく、言葉と言葉がおのずと織りなしていくものであるということ。
- (c) 詩人とは、頭の中に何となく存在するものを、文字を使うことで目に見えるかたちに仕上げる言葉の魔術師であるということ。
- (d) 詩が生まれる場所などは私にとっては存在しておらず、そのように表現するのは言葉の上のごまかしではないということ。
- (e) 実際は心の中にイメージしたものを書くのだが、身体を使ってひとつの作品を作り上げると表現するほかないということ。

問三 本文中には次の二文が脱落している。これらの文が入る箇所として最も適切なものを、次の①～⑤のうちから一つ選び、解答欄の記号をマークしなさい。解答番号は、23。

詩を書くとき、私にはいつもこの感覚がよみがえる。この感覚、この作業こそが、私の実作における、詩を探し、詩を掘り当てる感覚なのだ。

- ①
- ②
- ③
- ④
- ⑤

問四 空欄Xに入る表現として最も適切なものを、次の①～⑤のうちから一つ選び、解答欄の記号をマークしなさい。解答番号は、

24。

- ① 不易流行
- ② 多岐亡羊
- ③ 手前勝手
- ④ 千差万別
- ⑤ 同工異曲

問五

傍線部B「私自身が実作において必要とするもの、必要として求めてやまないものは、ありていに言えば、視力であり、洞察力であり、表現力である」とあるが、それはなぜか。その説明として最も適切なものを、次のa)～e)のうちから一つ選び、解答欄の記号をマークしなさい。解答番号は、25。

- a) 詩を書くという作業の中で、不確かな想像や小手先の技を駆逐するために用いなければならないから。
- b) 現実をありのままに言葉に置き換えて、紙に写し取っていくためにはなくてはならないものであるから。
- c) 非常に偏ったいびつな自分の詩作方法であっても、読者の心を動かすためには必要とされるものだから。
- d) 鋭い感性や感覚、想像力よりも、詩作には埋もれているものを掘り出すという心意気が求められるから。
- e) 心とからだをすべてにわたって使用し、隠れている詩というものに触れることが詩作に欠かせないから。

問六

本文の表題として最も適切なものを、次のa)～e)のうちから一つ選び、解答欄の記号をマークしなさい。解答番号は、

26。

- a) 詩はいつ生まれるのか
- b) 〈字かくし〉という遊びの醍醐味だいごじ
- c) すでにそこにあるもの
- d) 不確かな想像が殺す作品
- e) 「考える」ではなく「感じる」







